ロシア地名の日本語表記に関する若干の考察

Some Considerations on Writing Russian Place-Names in Japanese

小　俣　利　男
Toshio OMATA

Ⅰ．はじめに

地名は土地の名称である。地名はその起源や変遷、場所の特性との関係などさまざまな側面から検討されている。そのため地名は総合的な研究対象とされ、地名学を成立させている。しかし、地名の最も基本的な機能は地表上の特定地点や一定の広がりを具体的に示すことである。したがって、重要なのは地名が指し示す土地の正確さ、すなわち人々が地名に出会った時、それをラベルとしてその場所や範囲について共通認識がもてることである。

さて、地名の使用環境を考えると、国内地名と外国地名の２つに分けることができる。日本の場合には、国内地名はその生成時より、多くが日本語表記である[1)]。他方、外国地名は、それが指し示す地点や広がりが国内地名のそれよりも位置の上で平均的に遠方であり、情報も少なく、その土地との関係も希薄であることに加えて、その日本語表記をどうするかという問題も派生させる。グローバル化の進展する今日、そうした外国地名との関係は各方面で強まりつつある。にもかかわらず、外国地名とりわけロシア地名の日本語表記は、何を優先させるかなど、その手続き内容によって微妙に、あるいは著しく異なってくる。

著者はロシア語や日本語など言語学を専攻しているわけではないし、現時点ではロシアを含めた地名学の研究をしているわけでもない。しかし、ロシア地名の日本語表記は研究対象地域の１つをロシアにしている著者にとって、表現手段として必要不可欠なものである。その使用に当たっては、これまでほとんど先行する表記を参照・利用してきたが、主に表記の幅に起因する諸問題を解決する必要性を感じてきた。また、地名表記についての言及に触れる機会もあった[2)]。そこで、表記の幅に起因する諸問題の解決に向けた道筋をつけ、そこに至るために議論を深めることは、日本におけるロシア研究の広範な分野に関わるバリアの１つを取り除くことにもつながるとの考えから、この度、ロシア地名の日本語表記について若干の検討を試みることにした。加えて、ロシア地名を生

産しているロシアにおいては、ソ連解体後の体制転換と移行期社会にあって地名の変更や行政地域の再編に伴う新地名の登場も数多くみられた。また、ソ連時代とはロシアの対外関係も変化して、地名の使用頻度が高まり、使用地名の範囲も拡大するものと予想される。こうしたロシア社会の状況を考えても、ここでロシア地名の日本語表記について考察することは時宜を得たものとなる。ところが、著者の知る限りでは、これまでロシア地名の日本語表記について体系的に検討したものはない。

さて、ロシア地名を日本語の表記にすることは、一見、一定のルールにしたがった単純な手続きのようにもみえる。しかし、この手続きを具体的に検討してみると、ロシア地名、とくにその固有名部分の特性と日本語表記の方法とも関係して、その複雑さが明らかになる。そこで本稿では、次のⅡ・Ⅲでロシア地名の日本語表記に関わる手続きを、その内容によって５つに分類することを提案し、それぞれについて若干の実例をあげて示す（表１）。このうち４つはそれぞれの手続きのうち何をどれだけ優先するかによって、結果としての日本語表記が異なってくる。また、最後の１つは、その影響が２単語以上で構成された地名に限られ、かつ日本語表記における記号の使用・不使用に関わるものである。そのようにロシア地名の日本語表記における分類を検討した後、Ⅳでロシア地名の日本語表記に関する現状と近年の変化傾向を捉え、ロシア地名の英語表記も若干取り上げながら日本語表記の特徴を指摘したい。Ⅴで、それまでの検討内容をまとめ、今後に向けた若干の提案を行いたい。

表１　現状におけるロシア地名の日本語表記：手続きと地名タイプ

１．翻字主義：日本文字への置換	
ａ）名詞形かつ主格形の固有名部分をもつ地名：	
名詞形の固有名部分をもつ地名（その１）	［Ⅱ－１］
ｂ）接頭語を付して造語された形容詞形＋地域単位名：	
形容詞形の固有名部分をもつ地名（その１）	［Ⅱ－２］
２．表音主義：発音転写	［Ⅲ－１］
３．表意主義：日本語訳	［Ⅲ－２］
４．慣用主義：慣用形	
ａ）名詞形かつ生格形の固有名部分をもつ地名：	
名詞形の固有名部分をもつ地名（その２）	［Ⅲ－３－１)］
ｂ）「複合語化した形容詞形＋地域単位名または自然単位名」タイプの地名：	
形容詞形の固有名部分をもつ地名（その２）	［Ⅲ－３－２)］
ｃ）「その他の形容詞形＋地域単位名または自然単位名」タイプの地名：	
形容詞形の固有名部分をもつ地名（その３）	［Ⅲ－３－３)］
ｄ）その他の慣用形	［Ⅲ－３－４)］
５．単語間表記形式：ハイフン，スペース	［Ⅲ－４］

注）表中の［　　］内は本稿で取り上げている章節項を示している。　（小俣作成）

なお、本稿では一般的に地名表記の参照対象とされる地図帳・辞書・外国語文献は引用・参考文献として取り扱うが、日本語表記の実例をあれこれ示す場合、そうした表記が採られている文献を個別に提示することはしない。そこでは、地名は本来の目的のために使用されており、したがって地名表記の範を必ずしも示しているわけではない。その点、地図帳・辞書などとは機能や性格が異なる。

また、本稿におけるロシア地名とはロシア語で表記されたロシアにおける地名を指す。同様にロシア文字とは、ロシア語のつづり字という意味である。必要に応じて、地名の構成部分を固有名（部分）と地域単位名ないしは自然単位名に分ける。例えばモスクワ市город Москваの場合、モスクワМоскваが固有名部分、市городが地域単位名となり、またウラル山脈Уральские горыの場合、「ウラルの」Уральскиеが固有名部分、山脈горыが自然単位名となる。

Ⅱ．翻字主義：日本文字への置換

翻字主義は一定のルールに基づいてロシア文字の日本文字への置き換え、すなわち文字システムの置換によって、ロシア地名を日本語表記に変える。一部の地名では翻字だけでなく、地域単位名や自然単位名などの位置も変える。ただし、翻字は１文字対１文字の単純な置換ではないため、一定のルールが必要になる。例えば、ロシア地名中の母音字を伴わない子音字については、日本語表記ではいずれかの母音を添えることになる。これはロシア文字が単音文字（音素文字）であるのに対し、片仮名や平仮名は音節文字であるからである[3)]。具体的にロシア文字тについて例示すると、名詞形Камчаткаを日本語表記する場合、тの表記法によってカムチャトカあるいはカムチャツカになり、後者をさらに変形したものと思われるカムチャッカという表記もある。なおКамчаткаの場合、мも母音を添えてム（mu）と表記されている。また、ロシア文字では異なっているが、日本語表記は同じものになることもある。例えば、南部の都市Краснодарクラスノダルとウラルの工業都市Нижний Тагилニージニー・タギルの語末はそれぞれрとлで異なるが、日本語表記では同じ「ル」に翻字される。

さて翻字主義として、一定のルールに基づいてロシア文字を日本文字へ置き換えることを前提にすれば、ロシア地名はそのタイプに応じて固有名部分が名詞形かつ主格形でそのまま翻字できるものと、形容詞形であるが名詞形のようにそのまま翻字しているものに２分類される。

１．名詞形かつ主格形の固有名部分をもつ地名：名詞形の固有名部分をもつ地名（その１）

都市名、多くの共和国名、河川名、湖沼名、多くの島名、一部の海域名などが該当する。その多

くは固有名の部分が名詞形であり、かつ主格形である。ただし、一部に名詞形ではあるが、生格形のものもある。これについては、一般的には固有名部分の生格形を主格形に変えて表記されるため、後述する。このタイプのロシア地名では、固有名部分を原則として一定のルールを作って片仮名に置き換える。なお、地域単位名や自然単位名が付いている場合は、それらは固有名部分の前に置かれており、日本語表記に変える際に、日本語における表記法に合わせて後方に置き換えてきた[4)]。例えばРеспублика Башкортостанは、前にあった行政地域名が共和国とされて後方に移され、バシコルトスタン共和国と表記される[5)]。同様に、озеро Байкалがバイカル湖、река Волгаがヴォルガ川、город Новосибирскがノヴォシビルスク市とそれぞれ表記され、自然単位名や地域単位名が省略されたВолгаやНовосибирскはそれぞれヴォルガ、ノヴォシビルスクと表記される。

この他に、Ростов-на-Донуは翻字ではロストフ・ナ・ドヌーとなるが、固有名の一部分のみが翻字された形でロストフと表記されることがある。この場合、「ナ・ドヌー」の省略を１つの慣用とみなすこともできる[6)]。

２.「接頭語を付して造語された形容詞形＋地域単位名」タイプの地名：形容詞形の固有名部分をもつ地名（その１）

このタイプの地名では、固有名部分が位置関係・自然に基づいて、すなわち多くは河川、湖、山地などの地名に接頭語при-, по-, за-, пред-（перед-）を付して、造語された形容詞形となっている。なお、この形容詞形の語幹に-ьеを付した名詞は一定の範囲を表す地域名となる。

連邦構成主体の例として、Приморский крайプリモルスキー・クライと、合併によって2008年３月に誕生したЗабайкальский крайザバイカリスキー・クライを取り上げる。Приморский крайは、固有名部分と地域単位名をともに日本文字へ置き換えるか、あるいは行政地域名のみに地方をあてて表記するかの２通りが考えられ、プリモルスキー・クライあるいはプリモルスキー地方となる。この地名では、固有名部分が形容詞形の他の多くのロシア地名の日本語表記[7)] のように、固有名部分である接頭語付き造語による形容詞を変形して名詞形にした後に、翻字することができない。なぜならロシアではПриморскийの名詞形であるПриморьеプリモーリエは第一義として自然条件によって画定された具体的な地域を意味し、第二義としてПриморский крайプリモルスキー・クライの領域についての、非公式の、よく使われる名称とされているからである[8)]。またПриморьеプリモーリエは、日本で刊行されている露和辞典でもロシア語表記の語頭を小文字にして「沿海地」、一部の辞書では表記のように見出し語の語頭を大文字にして「沿海地方」という訳が与えられている。すなわち、Приморский крайの固有名部分の名詞形Приморьеは、よく使われるとはいえ非公式の名称であり、かつすでに領域を含意している地名であるので、それを基に翻字して、プリモーリエ・クライ、あるいはクライに地方をあてプリモーリエ地方と表記することは

できない。そこで、固有名部分については変化語尾を付したまま翻字してプリモルスキー地方と表記されることになる。同様に固有名部分の日本語訳「沿海の」から沿海地方とされることもある。これは後述のように表意主義に基づく表記となる。

Забайкальский крайザバイカリスキー・クライも、行政地域として形成後の日は浅いが、理由はプリモルスキー・クライの場合と同じである。そのため、日本語表記では行政地域名をクライと地方のどちらかにするにしても、固有名部分は翻字によってザバイカリスキーとするか、翻字ではなく日本語訳して外バイカルあるいは後バイカルとするかの選択になる。さらに、Поволжский экономический районは、上述の例示と同様に地域単位名を経済地域としても、固有名部分の名詞形Поволжьеパヴォルジエは「パヴォルジエ、またはヴォルガ川流域」（『岩波ロシア語辞典』：1294）を意味するため、上述のように、固有名部分の名詞形への変形後の翻字という方式を適用できない。そこで、固有名部分の翻字によってポヴォルジスキー経済地域とすることになる。この場合も、翻字ではなく、発音を重視してパヴォルシスキーとするか、日本語訳して「沿ヴォルガの」とする選択もあり、多くは表意主義すなわち日本語訳を選び、沿ヴォルガ経済地域という表記を採っている。

Ⅲ．日本語表記における発音、表意、慣用、形式

１．表音主義：発音転写

本稿でも一部を除いて原則としてロシア文字を片仮名に翻字する方法をとっている。しかし、表記上、現地音の尊重・優先ということにすれば、ロシア地名の日本語表記も異なってくる。

１）オーカニエとアーカニエ

アクセント[9]のないoについては、オーカニエоканьеではoオ、アーカニエаканьеではaアまたはそれに近い発音になる。ヴォルガ川支流のОка川はoにアクセントがないので、オーカニエではオカ川であるが、アーカニエではアカ川となる。アーカニエは南方方言の特徴とされ、標準ロシア語になっている（『岩波ロシア語辞典』：15）。ちなみに、この川はモスクワの南約100kmを流れており、モスクワ川の合流先でもある。モスクワからオカ川へのバスを使ったエクスカーションで、車中繰り返し耳にしたのは日本語表記とはまったく異なるアカ（川）であった。

２）子音字の無声化・有声化

子音字はその位置や他の子音字との結合のしかたによって音変化し、有声子音の無声化や無声子

音の有声化などがみられる。その結果、そうした発音上のルールにどの程度従うかによって、表記は若干異なってくる。多くは濁音になるか清音になるかの違いであり、語末における有声子音の無声化に関わるものである。例えば、Псковプスコフ、Кировキーロフ（アーカニエの場合はキーラフ）、Тамбовタンボフ、Саратовサラトフ（アーカニエの場合はサラータフ）などのように語末のв（ローマ字に翻字するとv、以下同様）は発音上のルールに従って無声化し、発音上ф（f）となる。Санкт-Петербургサンクトペテルブルク、Оренбургオレンブルクなどのように語末における子音字гは、発音上кと同じ音になる。Воронежヴォロネシのように語末のжは、発音上のルールに従うと無声化してш（sh）と表記され、翻字ではヴォロネジであるが、発音転写ではオーカニエの場合はヴォローネシ、アーカニエの場合はヴァローネシとなる。Белгород翻字で（以下同様）ベルゴロド、Волгоградヴォルゴグラード、Калининградカリーニングラードなどの語末のдは、発音上のルールに従うと無声音化してтとなり、発音転写ではオーカニエの場合はベェルゴロト、ヴォルゴグラート、カリーニングラート、アーカニエの場合はベェルガラト、ヴァルガグラート、カリーニングラートとなる。

また、語末でなくても、子音字の組み合わせによっては有声子音が無声化する。例えば、日本でもよく知られている、日本海に面した港湾都市Находкаは、翻字ではナホドカであるが、ナホトカと日本語表記される。なぜなら、この地名中の子音字дはкの前にあるために無声音化してтと同じ発音になるからである。またКавказカフカスの場合、вはНаходкаのдと同様に無声化し、зは上記の語末の無声化によってカフカスという表記が一般的である。さらに、少数ではあるが、無声子音が有声化することもある。例えば、タタールスタン共和国南東部のКзыл-Ярクズィル-ヤル、ザバイカリスキー地方北東部のСбегаスベガは語頭の子音字が有声化して、それぞれグズィル-ヤル、ズベガと表記される。

実際、語末における有声子音の無声化はロシア地名の日本語表記にさまざまな影響を与えている。ここのさまざまの影響とは、現状では発音上のルールに従った表記か否かが、地名によっても、さらに同一地名でも地図帳や辞書によっても異なっているからである。この点に関して具体的には後述したい。

3）軟音符

語末の軟音符ьを日本語表記に反映させるか否か、すなわち反映させると軟音符前の子音が軟音化し、発音上「子音に『短いィ』の音色が加えられる」（『研究社露和辞典』：2744）ことになり、それに対応して日本語表記も若干異なってくる。例えば、モスクワの北西にある州都Тверьはトヴェリ、同じくその北東にある州都Ярославльはオーカニエでヤロスラヴリと表記されている。他方、タタールスタン共和国の首都Казаньやリャザン州の中心都市Рязаньは、子音の軟子音化を反映させると表記上、カザニやリャザニとなる。そうした表記が定着すれば、本章の３－３）で取り上げる方式に従うとリャザン州は「リャザニ」州となるし、同様にヴォルガ川河口部の都市Астрахань

とそこを州都とするАстраханская областьもアストラハニ、アストラハニ州と表記することになる。ちなみに、こうした表記は西シベリア平原南西部の都市チュメニとそこを州都とするチュメニ州の場合、すでに定着している。

２．表意主義：日本語訳

ロシア地名を日本語表記する際、ロシア地名の固有名部分の全部ないしは一部を日本語に翻訳して表記する場合がある。例えば、自然地名ではСреднерусская возвышенностьの場合、翻字では「スレドネルースカヤ」となる固有名部分を「中央ロシアの」と日本語訳し、自然単位名を丘陵にすると、中央ロシア丘陵という表記になる。同じく、Западно-Сибирская равнинаは固有名部分を「西シベリアの」と訳し、自然単位名を平原として西シベリア平原と表記される。また、地域区分名の例をみると、Центральночернозёмный экономический районは翻字ではツェントラリノチェルノジョームヌイとなる固有名部分が、多くの場合「中央黒土の」と日本語訳され、かつ地域単位名を経済地域として中央黒土経済地域と表記されてきた。同様にЦентральный федеральный округは中央連邦管区、Сибирский федеральный округはシベリア連邦管区、Дальневосточный федеральный округは極東連邦管区などと表記されてきた。連邦構成主体ではЕврейская автономная областьは固有名部分を「ユダヤの」あるいは「ユダヤ人の」と訳し、地域単位名に自治州をあてユダヤ自治州あるいはユダヤ人自治州と表記されるが、同時に本章の３－３）で示している方式によって翻字し、エヴレイ自治州という表記もみられる。一方、前章で言及したプリモルスキー・クライは固有名部分を翻訳して地域単位名に地方をあてて沿海地方、あるいは全て日本語に翻訳されて沿海州などとも表記されている。

３．慣用主義：慣用形

慣用とは「広く一般に用いられること」（『広辞苑第六版』）とされるが、ここではそうした説明では意味がない。そこで『広辞苑第六版』の「慣用語」の定義「正しい語法にかなっていないが、慣用されている語」における「語」を「表記」に置き換えて、「正しい表記法にかなっていないが、慣用されている表記」とする。この場合、何が正しい表記法なのかが問題になる。なぜなら、正しい表記法に表意主義である「日本語訳」を含めるか否か、表音主義でもアーカニエを採るかオーカニエを採るかなど、表記法の正しさの設定が選択可能であるからである。そこで、慣用形の基準が明確になるように、ロシア地名の固有名部分の全部または一部について本稿でこれまで取り上げてきた翻字主義、表音主義、表意主義に基づかずに表記されたものを慣用形と呼ぶ。そうすると慣用

形は大きく２つに分けられる。１つは基本的には翻字主義であるが、翻字前にロシア地名の名詞形や形容詞形の固有名部分を一部省略ないしは変形している日本語表記である。これは固有名部分の品詞によって２つに分けられる。１つは名詞形であるが生格形の固有名部分をもつロシア地名、もう１つは形容詞形の２つのタイプで、複合語化した形容詞形を固有名部分にもつロシア地名と、その他の形容詞形を固有名部分にもつロシア地名である。なお、その他の形容詞形とは、複合語化した形容詞やⅡ－２で取り上げた接頭語を付して造語された形容詞を除く、最も一般的な形容詞である。もう１つは、それ以外の慣用形、すなわち日本語表記に際して固有名部分の名詞形や形容詞形に対する一部省略・変形を伴う前３者のような手続きとは関係のない慣用形表記である。

１）名詞形かつ生格形の固有名部分をもつ地名：名詞形の固有名部分をもつ地名（その２）

島や山脈などの一部でみられる。その数は多くはない。このタイプの地名では一般的には固有名部分の生格形を主格形に変えた後に、翻字して日本語表記する。

例えば、北極海にあるостров Октябрьской Революцииは、自然単位名の島を後方に移動してオクチャブリスカヤ・レヴォリュツィア島となる。この事例では、表音主義を徹底して発音のルールにより近づけるとアクチャーブリスカヤ・リヴァリューツィア島となり、また、中点を使うか否かについても選択の余地がある。さらに、本章２のように表意主義によって固有名部分を日本語訳して十月革命島とすることもできる。また、Хребет Черскогоは固有名部分を主格形Черскийにした後に翻字し、自然単位名を山脈として後方に移動して、チェルスキー山脈と表記される。

なお、本項で取りあげた表記法は、ロシア地名の固有名部分の名詞形が生格形になっているものを主格形に変形しただけであり、その後は翻字をしている。そのため、このような表記法は翻字主義に分類されるべきであるという考えもあり得る。しかし、このタイプの地名の場合もⅡ－２のようにそうした変形をせずに、地域単位名や自然単位名も含めて翻字するという表記も不可能ではない。それゆえ、本項の表記法は翻字主義そのものではないことになる。この点については、Ⅴで述べたい。

２）「複合語化した形容詞形＋地域単位名または自然単位名」タイプの地名：形容詞形の固有名部分をもつ地名（その２）

ロシア語では複数の単語からなる地名が修飾形になる際、複合語化すなわち１単語に変形されて形容詞形になる。このタイプの地名では多くが、本来の固有名に「新」、「旧」、「上」、「中」、「下」、「大」、「小」や方位などが付加された形になる。例えば、連邦構成主体レベルではНижегородская область、地区レベルではベルゴロド州にあるСтароосколький районの場合、形容詞形の固有名部分はそれぞれНижний НовгородやСтарый Оскол の修飾語化したものである。このタイプの地名の場合、固有名部分の形容詞形を変形して、複合語化する前の名詞形にした後、片仮名に翻字して表記されることが多い。日本語表記では漢字・仮名を問わず固有名部分が名詞形になるからで

ある。そこで、上記の例では、それぞれニージニー・ノヴゴロド州、スタールイ・オスコル地区とされる。

なおДальневосточный федеральный округの場合は、形容詞形の固有名部分はДальний Востокの修飾語化したものであり、翻字によってダリニー・ヴォストクとなる。しかし、一般的には日本語訳して「極東の」あるいは極東とされ、地域単位名に連邦管区をあて極東連邦管区と表記される。こうなると、本章２と同じ対応になり、表意主義による表記ということになる。

このタイプの地名すなわち複合語化した形容詞形を固有名部分にもつ地名は、連邦管区や連邦構成主体レベルでは少ない。しかし、地方（クライ）・州内の地区レベルには多数ある。ちなみに、2007年現在、上述のベルゴロド州だけでも他にНовооскольский районやКрасноярский районがあり、上記の手続きに従うとノーヴイ・オスコル地区やクラースナヤ・ヤルーガ地区と表記されることになる。

なお、本項で取りあげた表記法も、ロシア地名の固有名部分における形容詞形を複合語化前の名詞形に変形しただけであり、その後は翻字により日本語表記を得ている。しかし、前項と同じく、この手続きも翻字主義そのものではない。

３）「その他の形容詞形＋地域単位名または自然単位名」タイプの地名：形容詞形の固有名部分をもつ地名（その３）

一部の共和国名、地方・州・自治管区・地区などの行政地域名、各種の地域区分による地域名、多くの海域名、一部の湖沼名、平原名、島名、高地名、丘陵名などが該当する。このタイプの地名では、一般的には形容詞形となっている固有名部分を名詞形に変形した後、片仮名に翻字して表記されている。例えば、Архангельская областьは固有名部分の語尾を除いた名詞形Архангельскを片仮名に置換し、地域単位名областьに州をあて、アルハンゲリスク州と表記する。一方、同州内にあるНенецкий автономный округは同様に固有名部分がненецネネツ、地域単位名を自治管区としてネネツ自治管区となる。なお表意主義に基づいて固有名部分Ненецкийを日本語訳すると「ネネツ（人）の」になり、ネネツ（人）自治管区と表記される。自然地名の場合でもロシア平原に数多くみられる丘陵の１つВалдайская возвышенностьは固有名部分の名詞形がВалдайヴァルダイとなり、自然単位名を丘陵としてヴァルダイ丘陵と表記される。しかし、同平原北部にある丘陵のСеверные Увалыはこれまでと同様の手続きでは表記できない。これは「ゆるい勾配の長い丘」（『コンサイス露和辞典』：1153）あるいは「長く連なったなだらかな丘陵」（『岩波ロシア語辞典』：2019）などという意味の自然単位名部分を有するが、この単語も頭文字が大文字になっている。したがってУвалыウヴァルイは固有名の一部として扱われ、その結果Северныеを片仮名に翻字してセーヴェルヌイエ・ウヴァルイとするか、あるいは日本語訳して北ウヴァルイとされる[10)]。この場合も、ロシア地名中の２単語間に中点などの記号を使うか否かという選択肢もある。

なお、本項で取りあげた表記法も、翻字前にロシア地名の地域単位名や自然単位名はともかく、

形容詞形の変化語尾ではあるが、固有名部分を一部分、変形しており、慣用形として位置づけられる。

４）その他の慣用形

慣用主義による表記は、日本語の発音上の特性、英語などロシア語以外の介在など種々の経緯により使用され始め、長年の間に慣用的な表記として定着してきたものである。例えば、ロシア文字の片仮名への翻字ではヴラジヴォストクとなるВладивостокがウラジオストク、モスクヴァとなるМоскваがモスクワ、ロシヤとなるРоссияがロシア、シビーリとなるСибирьがシベリア、イヴァノヴォとなるИвановоがイワノヴォというように表記されることが多い。さらに、ロシア北西部の共和国名Карелияの場合、翻字主義ないしは表音主義によるカレリヤという表記とともに慣用形のカレリアも使用されている。また、中央ロシア高地もロシアあるいは「ロシアの」という慣用形を含んだ地名とすることもできる。

さて、こうした慣用形の使用拡大や定着には露和辞典や地図、とくに前者が果たす役割が大きい。なぜなら、辞書の使用者は、注記などがなければ、表記上の慣用形というより語義、しかも多くの場合は一定のルールにしたがった地名表記として捉えるからである。ある地名について、より多数の辞書で共通の慣用形表記が与えられていれば、それだけ慣用度も高くなり、そうした表記の定着速度も高まる。

４．単語間表記形式：ハイフン、スペース

ロシア地名中のハイフンやスペースを重視して表記すると、Санкт-Петербургはサンクトーペテルブルクあるいはサンクト・ペテルブルク、Ростов-на-Донуはロストフ-ナ-ドヌーあるいはロストフ・ナ・ドヌー、Великий Новгородはヴェリーキー・ノヴゴロドとなる（語末は現状でより一般的な表記を採用した）。ハイフンの代わりに「=」記号を使用し、例えばサンクト=ペテルブルクと表記されることもある。ハイフン[11]、スペースはともに主に欧文表記で多用されてきたが、このうちハイフンは地名を含む外国語固有名詞の日本語表記時に使用されるようになったものと思われる。ちなみに、ハイフンや中点をなるべく使用しない表記もある。例えば、サンクトペテルブルク、ヴェリーキーノヴゴロドという表記も可能である。また、ロシア国内を対象にした地域区分の１つによる地域名としてのЕвропейский Северを、表意主義によってヨーロッパ・北部あるいはヨーロッパ部・北部とすると誤解を生みやすい。そこで、ヨーロッパ北部ないしはヨーロッパ部北部と表記される。

Ⅳ．ロシア地名の日本語表記における現状と近年の傾向：英語表記にも言及しながら

ここではロシア地名の日本語表記について、その現状と近年の傾向を明らかにしてみたい。そこで高等学校地理歴史科用教科書である学校地図帳（以下、地図帳）におけるロシア地名の日本語表記を具体的な検討対象とする。なぜなら、地図帳は毎年、多数の生徒に利用されるため大きな影響力を有し、とりわけ利用者が若者であるだけに、その影響の持続性も大きい。同時に、地図帳は改訂頻度が高いために、地名だけでなく、その表記上の変化を早期に反映させることができる[12)]。使用した地図帳は内容的かつ時系列的な比較検討ができるように２社すなわち帝国書院版『新詳高等地図』、二宮書店版『高等地図帳』の各１冊について、最近十数年間の変化傾向を把握するために1994年発行のものと最新版である2008年を選んだ[13)]。なお時系列の比較検討のために1994年と2008年を選んだのは、ロシア地名の表記を問題とするにあたり、ソ連解体後、一定の時間が経過し、かつ2種の地図帳の発行月が近い年とすることによって、1990年代に急激に進展したグローバル化の影響も捉えられるからである。

ロシアやその一部に関する図幅から地名を選択して、まとめた（表２）。表中で取り上げられているのは、第１に設定期間にその表記が変化した地名と、第２に地図帳間で表記が異なる地名である。第３に第１、第２の地名群と表記上関連する地名や表音主義では別の表記も可能な地名を事例として若干加えた。さらに、これらの地名について、地名表記を確認・確定する際に参照する可能性のある主要露和辞典の表記も示してみた。確かに露和辞典は見出し語についての語義を示すことを第１目的としているが、一部を除き、多くの場合はその語義がそのまま地名表記にも使用されるからである[14)]。なおウラジオストク、リャザニは地図帳のみでは当初、第３の地名群として選ばれたが、露和辞典の表記を加えたことによって、複数表記地名に分類されることになった。いずれにせよ、表２は地図帳に記載された全ロシア地名を取り上げたものではなく、表記上、特徴を有する主要地名を列挙したものである。

まずロシア地名の日本語表記の現状をみるために、表２によって同一地名における表記の幅を取り上げる。なお、帝国書院版の「プリモルスキー（沿海州）」という表記は、すでにⅡ－２で言及しているように、プリモルスキーに地方かクライを付ける必要があろう。この地名は後にみるように、辞書も含めて検討する際にも重要な事例になるので、カッコ内の沿海州から判断して行政地域名とみなし、プリモルスキー地方として以下、取り扱う。２種の地図帳間で表記上の幅が認められるのは４地名である。このうちロシア文字я（発音はja）を国名についての慣用主義ないしは英語表記に依拠した日本語表記として「ア」とするか表音主義によって「ヤ」とするかに関するもの２例、翻字主義か表音主義かによるもの１例、慣用主義か表音主義かが１例である。このうち３例は語末の表記に関わるものである。４例に共通して、表音主義への対応が日本語表記に幅を生み出し

表２　学校地図帳・露和辞典におけるロシア地名の日本語表記例

		学校地図帳				露和辞典			
	発行所	帝国書院		二宮書店		研究社	岩波書店	博友社	三省堂
	発行年	1994年	2008年	1994年	2008年	1988年	1992年	1995年	2003年
複数表記地名	アストラハン	○		○		○	○		○
	アストラハニ		●		●			○	
	イワノヴォ	○	○	○			○	○	○
	イヴァノヴォ				●	○			
	ウラジオストク	○	○	○	○	○	○		○
	ウラジボストーク							○	
	ヴォロネジ		●			○	○	○	○
	ヴォロネシ	○		○	○				
	エカテリンブルグ	○		○		×	○	○	×
	エカテリンブルク		●		●	×			×
	オレンブルグ	○				○	○	○	○
	オレンブルク		●	○	○				
	カザン	○		○		○	○		○
	カザニ		●		●			○	
	コーカサス	△(一部)	△(一部)	△(一部)	—			△	△
	カフカス	○	○	○	○	○	○	○	○
	カルムイク(共和国)							○	
	カルムイキア(共和国)	○	○			×	○		○
	カルムイキヤ(共和国)			○	○				
	カレリア(共和国)	○	○			○ＡＣＣＰ	○ＡＣＣＰ	○	○
	カレリヤ			○	○				
	ケーニヒスベルク	○		○					
	カリーニングラード		●	△	●	○	○	○	×
	サンクトペテルブルグ	○		○		☆	○	○	○
	サンクトペテルブルク		●		●				
	沿海州	△	△				△	○	
	沿海地方			△	△	△			○
	プリモルスキー	○	○						
	プリモルスキー地方			○	○	○	○		
	リャザン					○	○		○
	リャザニ	○	○	○	○			○	
	ロストフ	○	○	○	○				○？
	ロストフ・ナ・ドヌー		▲(翻字)	△(一部)	—		○	○	
	ロストフ・ナ・ダヌー					○			
同一表記地名	ヴォルゴグラード	○	○	○	○	○	○	○	○
	キーロフ	○	○	○	○	○	○	○	○
	極東	×	●	×	×	○	○	○	○
	サラトフ	○	○	○	○	○	○	○	○
	シベリア	○	○	○	○	○	○	○	○
	チュメニ	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハバロフスク地方	×	×	○	○	△	△	×	×
	プリヴォルガ高地	○	○	○	○	×	☆(訳語)	×	×
	ベルゴロド	○	○	○	○	○	○	×	×
	モスクワ	○	○	○	○	○	○	○	○

注1）学校地図帳は帝国書院版『新詳高等地図』の最新版（1994年）、初訂版（2008年）、二宮書店版『高等地図帳』の最新版（1994年）、改訂版（2008年）を使用した。露和辞典の書誌情報は別記した。
2）表中で「ヴォ」と「ボ」を区別しない。複数単語地名の中点・ハイフンはロストフ・ナ・ドヌーのみで使用した。
3）アクセント母音の長音符号による表記分けは原則としてなし。ただし、１例のウラジボストークは表記した。
4）○は該当地名あり、×は該当地名なし、黒色は表記の変化、—は記載停止を、それぞれ示す。
5）△はカッコ内や第2番目に併記など、第二義的な表記を示す。（一部）は大縮尺図のみに表記を示す。
6）二宮書店版（1994年）地図帳では、カルムイキヤ（共和国）はカルムイキヤ=ハリムグ=タングチと記載。
7）☆は訳語など、すなわち「聖ペテルブルグ」、「ヴォルガ川右岸の高地」をそれぞれ示す。
8）（翻字）は、省略なしで翻字によるローマ字表記の添付を示す。
9）研究社・三省堂両版辞書では、エカテリンブルクのロシア語表記はあるが、日本語表記はない。
10）三省堂版辞書では見出し語Ростовで「ロストフ（ヨーロッパロシアの都市）」とされ、ヤロスラヴリ州の同名都市との区別は不明である。

（各地図帳・辞書により小俣作成）

ている。第二義的なものでは、沿海州か沿海地方か、ロストフについて省略なしの翻字によるローマ字表記を添えるか否か、もう１つは最も軽微な表記上の幅でカフカスに英語表記起源のコーカサスを一部の図幅に表記するか否かの違いである。

主な露和辞典の発行時期は、最新のものでも５年前、最も早いものはソ連時代末期であり、地図帳と比べて時間的隔たりが大きい。しかし、どの辞書も現時点で流通しているものであり、その表記も加えて検討する。辞書間のみをみると、８地名[15] で表記上の幅が認められ、そのうち４地名は博友社版のみが他の辞書と異なる。一見、辞書間における表記の幅が大きそうであるが、地図帳は２種であったことを考えると、ほぼ同じ頻度ということになる。語末における子音の軟音化に関わるものが３地名、イワノヴォとウラジオストクのように慣用形に対して表音主義をより徹底したことによるものが２地名[16]、カルムイクとカルムイキアのように依拠したロシア地名が異なっていることによるもの、プリモルスキー地方に関わるもの、ロストフ・ナ・ドヌーに関わるもの、各１地名である。プリモルスキー地方では、固有名部分や行政地域名の日本語訳によって、またロストフ・ナ・ドヌーではна-Дону部分の省略、на-Донуの表記を翻字主義によるか表音主義によるかによって、それぞれ３種の表記がみられる[17]。第二義的なものでは、地図帳でもみられたようにカフカスについてコーカサスを付記するか否か、他の辞書で主たる表記としている沿海地方と沿海州を付記するか否かである。

さて、ここで取り上げた地図帳と辞書を同時にみると、現時点で表記に幅がみられるのは13地名である[18]。これは、上記の地図帳間・辞書間でそれぞれみられた表記上の幅のある地名中、両者に共通しているのが２地名、他方、地図帳間や辞書間では同一表記であるが、地図帳・辞書間では表記に幅のあるものが３地名あるからである。その多くは１地名につき２種の表記であるが、カルムイキア、プリモルスキー地方、ロストフ・ナ・ドヌーについては、それぞれ３種の表記がみられる。以上、複数表記地名を取り上げたが、以下、同一表記地名についても検討しておきたい。語末の子音については、チュメニ、キーロフ、サラトフなどは、ここで取り上げた全ての地図帳・辞書において早くから表音主義に基づいた表記が定着していた[19]。その一方で、語末の有声子音字の無声化は、サンクトペテルブルクなどブルク型の地名において表音主義による語末の表記が地図帳では一般化してきているのに、語末дはヴォルゴグラードやベルゴロドさらにカリーニングラードのように、地図帳でも依然として翻字主義による表記のままである。加えて、語末のжは二宮書店版地図帳ではВоронежヴォロネシのように表音主義によって無声化しшと表記されている。しかし現在でもすべての辞書と帝国書院版地図帳では表音主義ではなく翻字主義によってヴォロネジと表記されている[20]。

また、シベリアやモスクワのような慣用形は安定しており、西シベリア低地、中央シベリア高原、モスクワ川、スモレンスク・モスクワ丘陵などそれらを固有名部分に含んだ多数の地名表記にも使われている。「プリボルガ高地」は、辞書にはないが、２種の地図帳に共通した同一表記地名である。表意主義すなわち日本語訳による「沿ボルガ」を使わずに、「プリ」は翻字主義ないしは表音主義、

「ボルガ（の）」は表意主義または名詞形に変形後に翻字という手続きを組み合わせた表記として説明できよう[21)]。

次に地図帳に記載された地名のうち表に示したものについて、1994年と2008年の変化を取り上げる。この期間に表記に変化がみられたのは、帝国書院版で９地名、二宮書店版で８地名である。ただし、それらは前者ではロストフ・ナ・ドヌーについて省略なしでローマ字に翻字された表記が添えられ、極東という地域名が追加されたことを含み、後者では一部の図幅でカッコ内に示されていたコーカサス、同じくロストフ・ナ・ドヌーという表記が削除されたことを含んでいる。これらを除くと、７～６地名ということになる。このうち１つはケーニヒスベルクからカリーニングラードへの表記変化であり、訂正が揃って行われたともとれよう。1994年に、二宮書店版ではカッコ内にカリーニングラードが示されてはいたにせよ、両者ともケーニヒスベルクと表記したのは、こうした地名の変化が確認されていないことから、ソ連解体直後の状況や情報の混乱によるものと思われる（Котляков, 2003: 310-311）。もう１つは、二宮書店版でみられた、イワノヴォから研究社版露和辞典がつとに示していた表記でもあるイヴァノヴォへの変化、すなわち慣用形からより発音へ近づけるための表記変化である。その他は帝国書院版の６地名、二宮書店版の４地名は語末の表記変化であり、帝国書院版におけるヴォロネシからヴォロネジへという翻字主義すなわち発音からは遠ざかる表記への変化を除くと、有声子音の無声化や軟音記号による軟音化に対応したものである。したがって、表記変化の主因は表音主義の重視にある。この点は、帝国書院版における地名表記について、「原則として、日本語による表記も、欧文による表記も現地語音を取り入れている」（p.155）とされており、同書の特色として「国名表記は，可能な限り正式国名を採用した。地名表記は，現地文化の尊重の意味から現地での発音に近い表記を採用した」ことが表明されている[22)]。こうした地名表記における現地語音重視という原則は帝国書院版では1998年発行のものからみられる[23)]。他方、二宮書店版ではそうした表記原則の重視や変化は明示されていないが、上記の地図帳中の表記変化から判断すると、ほぼ同様の方向性が認められる。

ここでロシア地名において確認された現状や変化は、外国地名一般において指摘されている現地呼称の尊重、すなわち表記上、現地語ないしはその発音を重視する傾向と合致したものである[24)]。こうした趨勢は外国地名表記における現地発音重視ということであり、日本語に限らず様々の言語における外国地名の表記において基準の共通化が進行していることを示している。

次に、ロシア地名の他言語における表記と対比して、その日本語表記の特性を捉えるために、ロシア地名の英語表記をタイムズ・アトラス（Times Atlas）、ブリタニカ・アトラス（Britannica Atlas）、フィリップス・スクールアトラス（Philip's Modern School Atla）を対象に若干検討しておきたい。このうち、タイムズ・アトラスは、上述の両学校地図帳をはじめとして日本の多くの地図帳において都市名や自然地名など地名表記上の参照文献となってきている。そこで、この地図帳に関しては最近15年間の変化も取り上げたい。表３は日本語表記の検討に際して作成した表２にほぼ対応している。この表では、ロシア国内の地域名としては全く掲載されていない「極東」が除

表３　ロシア地名の英語表記例

Times Atlas[1]		Britannica Atlas	Philip's Atlas[2]
1992年	2007年	1996年	2007年
Astrakhan'	Astrakhan'	Astrachan'	Astrakhan
Ivanovo	Ivanovo	Ivanovo	Ivanovo
Vladivostok	Vladivostok	Vladivostok	Vladivostok
Voronezh	Voronezh	Voronež	Voronezh
Yekaterinburg	Yekaterinburg	Jekaterinburg	Yekaterinburg
Orenburg	Orenburg	Orenburg	Orenburg
Kazan'	Kazan'	Kazan'	Kazan
Bolshoy Kavkaz[3]	Caucasus[4]	Caucasus[5]	Caucasus
Kalmytskaya Resp.[6]	Respublika Kalmykiya-Khalm'g-Tangch	Kalmykija	Kalmykia
Karel'skaya Resp.[6]	Respublika Kareliya	Karelija	Karelia
Kaliningrad	Kaliningrad	Kaliningrad	Kaliningrad
Sankt-Peterburg	Sankt-Peterburg	Sankt-Peterburg[7]	St. Petersburg
Primorskiy Kray	Primorskiy Kray[8]	Primorskij Kraj	—
Ryazan'	Ryazan'	R'azan'	Ryazan
Rostov-na-Donu	Rostov-na-Donu	Rostov-na-Donu	Rostov
Volgograd	Volgograd	Volgograd	Volgograd
Kirov	Kirov	Kirov	Kirov
Saratov	Saratov	Saratov	Saratov
Siberia[9]	Sibir'[10]	Sibir'[11]	Siberia
Tyumen'	Tyumen'	T'umen'	Tyumen
Khabarovskiy Kray	Khabarovskiy Kray	Chabarovsk Kraj	—
Privolzhskaya Vozvyshennost'	Privolzhskaya Vozvyshennost'	Privolžskaja Vozvyšennost'	Volga Heights
Belgorod	Belgorod	Belgorod	Belgorod
Moskva[12]	Moskva[12]	Moskva[13]	Moscow
Nizhegorodskaya Oblast'	Nizhegorodskaya Oblast'[14]	Nižnij Novgorod Oblast'	—
Russsian Federation	Russsian Federation	Russia	Russia

1）The Times Atlas of the World.-Comprehensive ed.（1992）とThe Times Comprehensive Atlas of the World（2007）である。
2）Philip's Modern School Atlas（2007）。
3）一部の図幅でカッコ内にCaucasusの表記あり。
4）一部の図幅でカッコ内にBolshoy Kavkazの表記あり。
5）一部の図幅でロシア領側にBol'šoj Kavkazの並記。
6）Resp.はRespublikaの略。
7）小さな文字サイズでSt. Petersburgの表記あり。
8）地名索引に慣用形としてMaritime Kraiの表記あり。
9）ユーラシア概要図でのみSiberiaの表記あり。小集落名としてSibir'あり。
10）一部の図幅でカッコ内にSiberiaの表記あり。
11）小さな文字サイズでSiberiaの表記あり。
12）一部の図幅でカッコ内にMoscowの表記あり。
13）小さな文字サイズでMoscowの表記あり。
14）地名索引に慣用形としてNizhniy Novgorod Oblastの表記あり。
15）地名やその掲載順は原則的に表２に対応する。ただし、表記のない「極東」は除き、最下２行の地名を加えた。

（各地図帳より小俣作成）

かれ、代わりに英語表記上の特徴をみるためNizhegorodskaya Oblast'ないしはNižnij Novgorod Oblast'、すなわちその固有名部分を翻字するとそれぞれニジェゴロツカヤ州やニージニー・ノヴゴロド州となる地名と、国名が加えられている。

各アトラスにおけるロシア地名の英語表記上の特徴は、次のようになる。

まず、タイムズ・アトラスは、ロシアの国内地名を徹底した翻字主義によって表記している[25)]。例えばMoskvaやNizhegorodskaya Oblast'はその英語表記を日本文字に翻字するとモスクヴァやニジェゴロツカヤ・オーブラスチとなり、地域単位名や自然単位名についても省略・変形をせずにロシア地名を忠実に翻字している。なおMoskvaについては一部の図幅で第２表記としてカッコ内にMoscowという慣用形を記載し、Nizhegorodskaya Oblast'については巻末の地名索引にて慣用形としてNizhniy Novgorod Oblastを併記している。

新旧版の比較では、慣用形Siberiaを翻字によるSibir'に変えるなど翻字主義をより徹底している。またBolshoy KavkazがCaucasusに換えられている。一部の図幅ではあるが、それに伴って他方の表記が第２表記としてカッコ内に併記されている。カフカスという山脈がソ連邦内にあった時代とソ連解体により国際的な山脈になった結果、慣用形の英語表記に変更されたものと推察される。この点については、後述する翻字の適用範囲と関係づけて再び言及したい。なおKarel'skaya Resp.からKareliyaへの変化など、いくつかの共和国名の変化は、ロシア地名そのものの変化によるものであって表記法の変化ではない。

次にブリタニカ・アトラスでは、翻字後の文字に一部キャロンが使用されてはいるが、都市名、自然地名、地域名など、ほとんどの地名は翻字主義によって表記されている。一方、多くの連邦構成主体はChabarovsk Kraj、Nižnij Novgorod Oblast'、すなわち固有名部分のみ日本文字に翻字するとハバロフスク地方、ニジニー・ノヴゴロド州などのように、その手続きによって当該行政中心都市名と一致する場合、固有名部分の形容詞の名詞化ないしは変化語尾の省略後に翻字して表記されている。そうした手続きでは行政中心都市名と一致しない場合、表中のPrimorskij Krajを始めとしてAmurskaja Oblast'、Altajskij Kraj[26)]、すなわちプリモルスキー地方、アムールスカヤ州、アルタイスキー地方などとなり、固有名部分は変形・省略せずに翻字されている。また、Leningrad Oblast'レニングラード州をみると、固有名部分の形容詞の名詞化あるいは語尾省略による行政中心都市名との一致はソ連時代の都市名でもよいことになる[27)]。このアトラスのロシア地名は基本的には翻字主義で表記されているが、上記のような慣用主義による表記もみられ、表記手続き上、一貫性を欠いたものになっている。

さらにフィリップス・スクールアトラスではIvanovo、Vladivostokなどの翻字主義による表記だけでなく、Moscow、St. Petersburg、Siberiaなどの慣用形、Kazanなどでは語末の軟音化の無視がみられ、Volga Heights、West Siberian Plainなどのように接頭辞の省略、英訳などが固有名部分でみられる。３つのアトラス中では、このアトラスで慣用主義や表意主義による表記が最も目立つ。

３つのアトラスをみると、ブリタニカ・アトラスがやや出版年が古いが、翻字主義のタイムズ・アトラス、他方、慣用主義や表意主義のフィリップス・スクールアトラス、翻字主義が強いものの慣用主義との折衷型のブリタニカ・アトラスというように性格づけられる。このようにロシア地名の外国語表記にも、程度の差はあっても、幅が存在することが確認された。同時に、ロシア地名の英語表記においては、その依存度はアトラスによって異なるが、翻字主義、表意主義、慣用主義は日本語表記と同様に認められる。その一方、日本語表記との相違としては、英語表記には表音主義がみられないし、また単語間表記形式としてのハイフン、スペースはそのまま適用される。とくに前者については、英語の使用文字であるローマ字も単音文字であるために、若干の相違はあっても、ロシア文字との対応関係を明確にして翻字が可能である。その結果、同一地名における表記の幅は、英語表記よりも日本語表記の方が大きいことになる。さらに、もう１つ注目する必要があるのは、翻字と英訳の使い分けである。これは地名表記のポリティクスとも言えよう。例えば、翻字主義ないしは翻字主義を中心としているタイムズ・ブリタニカ両アトラスでは、国名は英訳ないしは慣用形のRussian Federation、Russiaであり、ロシアの領海内の海はBeloye More、Karskoye More、More Laptevykhと翻字で表記されている。これらの海は、日本の地図帳で白海、カラ海、ラプテフ海とされているものである。他方、Black Sea、Barents Sea、Caspian Seaはロシア以外の国も沿岸国になっており、英訳ないしは慣用形表記になっている。こうしてカフカスもロシアだけでなくアゼルバイジャンやグルジアに跨っているという捉え方では、慣用形の英語表記Caucasusとなる。これが、上述の新旧版で英語表記が換わった理由であろう。ブリタニカ・アトラスでこの山脈部を示した最大縮尺の図幅では、国境の走る稜線の北側すなわちロシア側に翻字でBol'soj Kavkazボリショイ・カフカス、南側にCaucasusと表記して両者を使い分けている（Britannica Atlas, 1996: 84）。国内地名に関しては翻字主義、国名以上に広範囲の地名については慣用形ないしは英訳表記を使用している[28)]。

Ⅴ．ロシア地名の日本語表記における問題点とその解決に向けて

本稿ではここまでロシア地名の日本語表記について具体的に検討し、日本語表記への変換という観点から地名のタイプ分けを提案しつつ、表記上の手続き、すなわち表記上の優先条件によって表記に幅があり得ることを明らかにした。また、地図帳でもロシア地名の表記に幅があり、同時にその日本語表記において、同一地図帳でも発行年によって異なるなど時系列的な変化も認められた。これらは英語など他言語による表記の影響もあるが、ロシア語・日本語双方の文字・文法・発音の特性に主に起因しており、ロシア地名の英語表記よりも表記に幅があることが明らかになった。本稿におけるこれまでの検討から導き出される、ロシア地名の日本語表記における幅を主な問題として整理・確認し、その解決に向けた若干の提案をしたい。

１．ロシア地名の日本語表記における諸問題：表記の幅とそれへの対応

ロシア地名の日本語表記における幅は、必然的なものであり、かつ大きい。表記上の手続きについては、現在流通している表記を事例としながら、本稿のⅡ・Ⅲで、翻字、表音、表意、慣用に分けて個別に検討した。そこで、ここでは同一のロシア地名がさまざまに日本語表記され得ることを、２つの地名について例示したい。まず、首都Москваについてみると、慣用主義ではモスクワ、翻字主義ではモスクヴァ、表音主義ではアーカニエの場合にはマスクヴァ、オーカニエの場合には翻字主義と同じモスクヴァとなる。表意主義による表記はないが、慣用主義によるモスクワという日本語表記の定着度の高さのため、日本語ではもっぱらモスクワという表記が流通してきたことになる。次に連邦管区の１つПриволжский федеральный округについてみると、表意主義では沿ヴォルガ連邦管区、翻字主義ではプリヴォルジスキー・フェデラリヌイ・オクルグ、地域単位名を日本語訳するとプリヴォルジスキー連邦管区、表音主義ではプリヴォルシスキー・フィディラーリヌイ・オークルク、同じくプリヴォルシスキー連邦管区となる。慣用主義としては、前章で言及した、２種の手続きを組み合わせた便宜的表現であるプリヴォルガ連邦管区がある。その言語学的な適否はともかくとして、慣用的な訳語地名から脱却するための独創的な試みとして評価できよう。なお、この慣用形は現状ではその使用頻度は高くはない。しかし、プリヴォルガ高地という表記が学校地図帳でみられる（表２）。またЗабайкальская железная дорогаの訳語としてのザバイカル鉄道（『研究社露和辞典』：571）も、固有名部分は同様の考え方で日本語表記されている。

現在、比較的多く流通しているロシア地名の日本語表記における主要な問題点は、上述の例示からも明らかなように、表記上の手続きの選択に関わるものである。とくに表記上、何を優先させるかによって、その手続きが異なってくるからである。

まず第１に、固有名部分の表記上の手続きにより、日本語表記が大きく異なる典型例として、Нижегородская областьニージニーノヴゴロド州について検討する。この地名についてはⅢで、現在流通している表記を慣用主義の１つのタイプとして取り上げた。このニージニーノヴゴロド州の場合、翻字主義によって変化語尾を付したままニジェゴロツカヤ州、表音主義のアーカニエではニジェガローツカヤ州という表記もできる。あるいはニージニーノヴゴロド州という表記と同様の慣用主義に基づき、変化語尾を省略後に翻字してニジェゴロド州とする表記もあり得る[29)]。固有名部分の形容詞Нижегородскаяは「ニージニーノヴゴロドНижний Новгородの」という意味であり、また州都のニージニーノヴゴロドに由来した州名であることも重要な事実であるので、日本語表記としてニージニーノヴゴロド州が慣用されてきたことも理解できる。したがって、固有名部分が名詞形であることにこだわるとすれば、いずれも慣用形のニージニーノヴゴロド（ニージニー・ノヴゴロド）かニジェゴロドかを選択することになる。しかし、州名は本来の機能として該当する都市、とくにその中心都市の存在を示すことではなく、州域という一定の範囲を示す固有名詞であって、

固有名部分Нижегородскаяという州が存在していることを示している。すなわち、翻字主義や表音主義によるニジェゴロツカヤ州やニジェガローツカヤ州が表記上の選択肢に入ってくる。連邦構成主体レベルでも、こうした固有名部分の形容詞形を翻字して表記している例として、Ⅱで取り上げたプリモルスキー地方などがあり、すでに広く受け入れられつつある。

次に、上述のプリモルスキー地方は翻字主義あるいは表音主義による表記であるが、同時に表意主義による沿海地方という表記も可能である。すでに前章でみたように、後者も第一義的表記あるいは第二義的表記として使用されている。しかし、日本語表記では固有名部分の語頭を大文字化することが不可能であることや、普通名詞としても意味が取れることを考えると、地名としての識別という点では翻字による表記の方が優っていることになる。一部に、行政地域名を州とした日本語訳による沿海州という表記もみられた。ただし、現在の行政地域名の表記として沿海州を使用することは、行政地域名として正式に州を付したプリモルスカヤ州ないしは沿海州がかつて長期間存在したことから、誤解を生みやすく適切ではない[30)]。

第３に、ともに多用され、表記としても安定している、上述の沿ヴォルガ（沿ボルガ、以下省略）連邦管区と沿ヴォルガ経済地域の問題である。両者は地域単位名をみれば異なっているものの、固有名部分の日本語表記をみると同一である。これは表意主義によって日本語訳された結果であり、ロシア地名の固有名部分はПриволжский、Поволжскийと同一ではない。しかも、地域単位名を付した時の両地名が具体的に示す範囲も一致していない。沿ヴォルガ連邦管区については本章で、沿ヴォルガ経済地域についてはⅡで述べた。「沿ヴォルガ」という表意主義に基づく日本語表記は具体的で、その指し示す範囲のイメージもわきやすい。沿ヴォルガ連邦管区と同経済地域を固有名部分においても表記上区別するためには、翻字主義か表音主義、あるいは慣用主義による表記を選ばざるを得ない。このような問題意識から、著者もかつてПоволжский（экономический）районの範囲を示す日本語表記として、表音主義によるパヴォルジエを使用したことがある[31)]。ただし、沿ヴォルガ経済地域もその１つである経済地域区分と連邦管区区分においては、「北西」「ウラル」「中央（中部）」、「極東」でも固有名の重なりがみられる。これらは「沿ヴォルガ」の場合とは異なり、ロシア地名そのものも同じであり、表意主義に限らず地域単位名で判別するしかない。その中で、「極東」経済地域は同連邦管区とその範囲も一致している。

Поволжский экономический районはソ連時代から頻繁に使用され、表意主義により沿ヴォルガ経済地域と表記されてきた。この地域区分はソ連解体後もロシア国内の主要な地域区分として継続的に使用され、沿ヴォルガ地域と表記されてきた。ところが、2000年の連邦管区導入により、その１つであるПриволжский федеральный округも沿ヴォルガ連邦管区と表記され、連邦管区別統計分析などで多用されるようになった[32)]。「沿ヴォルガ」表記問題は、どのような表記が適切かを判断して表記上の手続きを選択する必要があることを提起しており、その点では他の表記問題と共通している。それと同時に、表記の適・不適は類似したレベルにおける他地名との関係によっても判断されねばならないし、加えて、そうした関係は地名の出現・消滅によって時間的にも変化す

ることも示している。この事例は、表記上の手続きを選択することの難しさを表している。

第４に、国名・国内地名と表記上の手続きとの関係も検討対象になる。例えば、前章で言及した共和国名であるカレリヤとカレリアはその語末において表記上の違いが認められ、前者が翻字主義、後者が慣用主義である。表音主義ではカレーリヤであるが、翻字主義と大きな違いはない。同様な関係はカルムイキヤとカルムイキアなどにもみられる。この場合、上述の地図帳では一方がカレリヤ、カルムイキヤと表記し、他方がカレリア、カルムイキアと表記していた。国名については、翻字主義に基づくロシヤという表記もかつてはみられた[33]が、現在では通常、ロシアないしはロシア連邦と表記されている[34]。したがって、カレリアでなくカレリヤを採用している地図帳でも、国名はロシア連邦になっている。こうした対応は国内地名について翻字主義を徹底しているタイムズ・アトラスや、同じく主に翻字主義に依拠しているブリタニカ・アトラスでも認められ、両アトラスは国名をRussian FederationやRussiaと表記している。このように国名と国内地名の慣用主義と翻字主義すなわち表記上の手続きの使い分けは、日本語表記のあり方を考える上で注目される。

第５に、前章において検討したロシア地名の日本語表記や英語表記の現状とも関係して、現在流通している表記のうち、表記上の手続きとしては可能であっても、どちらかと言えば適切ではないものもある。ここではロストフと北コーカサスを取り上げる。まず、ロストフという表記である。これは都市の位置から判断してРостов-на-Донуのことである。この都市名は翻字主義でロストフ・ナ・ドヌーとなる。したがってロストフとは、その「ナ・ドヌー」部分が省略された形である。この表記を慣用形として捉えたとしても現状では問題がある。なぜなら、ヤロスラヴリ州にРостовロストフというロシア語表記でも同一の都市が存在しているからである。これまでロシアやましてソ連というスケールで表示される地図上では、人口100万都市で州都でもあるロストフ・ナ・ドヌーは必ず示されることはあっても、人口3.3万（2007年現在, Росстат資料）の小都市はほとんどの場合、省略されてきた。また、現実的に、省略形のロストフでも通用してきたものと考えられる。しかし、正確性だけでなく、グローバル化という地域間関係の緊密化の中では「ナ・ドヌー」の省略表記は適切とはいえない。なお同形の地名であるコムソモリスク・ナ・アムーレКомсомольск-на-Амуреは、翻字によって「ナ・アムーレ」も省略されずに表記されている[35]。

第６に、上述のロストフと同様にカフカスや北カフカスに関わる表記がある。カスピ海から黒海に跨る大山脈はソ連時代はもちろんのこと、ソ連解体後もロシア国内側から捉えた場合は、Большой Кавказあるいは略記してКавказである。Большой Кавказは表音主義でアーカニエの場合、バリショーイ・カフカス、オーカニエの場合、ボリショーイ・カフカス、表意主義で大カフカス（山脈）である。また、Кавказは表音主義でカフカスである。コーカサスは、あくまでもカフカスの英語訳ないしは慣用主義による英語表記Caucasusを日本文字に翻字したものである。したがって、コーカサスは英語的表現の必要性ないしは国際的な文脈の強調という条件下でのみ、その正当性を主張できる日本語表記ということになる。その意味で、地方名の固有名部分として使用され、この山脈の南北に跨る範囲を１つの地方として指す時は、カフカス地方とともにコーカサス

地方という表記が存在することになる。しかし、ソ連時代やその後のロシアにおける経済地域区分あるいは大地域区分による１地域であるСеверный Кавказはロシア地名であって、表記手続き上、翻字、表音、表意はもちろん、慣用主義であっても北コーカサス[36]という日本語表記はあり得ない。

最後に、ハイフン･スペースも表記に幅を生み出す。これらの使用･不使用は日本語表記に当たっての技術的な問題である。ただし、表記する地名の特徴によって使い分ける必要がある。

２．問題解決に向けた提案

ロシア地名は、その程度は地名によっても異なるが、さまざまな日本語表記が可能である。どの表記がよいかという議論も必要だが、順序としては表記に幅が存在していることを共通認識することの方が先である。日本語表記されたロシア地名はロシア国内の諸地域や諸地点を指し示すという本来の機能とともに、言語上の相違を通じた異文化理解や多文化共生への広がりをも有するからである。

その一方で、そのように日本語表記における幅が大きいにもかかわらず、現在流通している日本語表記をみると、その定義によっても多少変化はあるが、慣用主義や表意主義に基づく表記、あるいは両者を組み合わせた表記が多い。これまでは著者自身もそうだが、多くの場合、先行する表記を受け入れ、継承することで、慣用形を長年累積させてきたからである。したがって、日本語表記上の選択肢を共有可能にするため、あるロシア地名に関して、現在主に流通している日本語表記とともに、別の表記も存在しうることを認識しておくことは重要である。少なくとも慣用形以外の表記もあることを意識する必要がある。

そうした中で、Ⅳで言及したように、日本の学校地図帳でも地名表記における現地語音重視すなわち表音主義による地名表記への変化が、1990年代以降認められた。また外国地名一般において指摘されている現地呼称の尊重、すなわち表記上、現地語ないしはその発音を重視する傾向も言及されている。これらは急激に進行しているグローバル化によってローカルな地名がグローバルな展開を求められる現代世界の状況とも合致している。このことをロシア地名の日本語表記、とくに表記手続きに即して考えると、慣用主義や表意主義に基づく表記から翻字主義や表音主義の表記へ移行することが求められていると言えよう。

現状の日本語表記を改善する必要性についても議論の余地はある。具体的な改善策についてその方向性が示せないのなら、表記改善の是非についての議論も意味がないという考え方も成り立つ。また、改善を求めるとしても、表記の幅を容認して使い合って行くという現状追認的な方向か、一定のルールに合意して表記替えをして行くという方向とがある。そうした多段階の議論が起こるための問題提起となるよう、ロシア地名の日本語表記改善に向けた提案をしたい。

ここでは改善に向けて、表記手続きの選択に関わるロシア地名の性格づけについて２つの点を取

り上げる。第１は地名の公式性である[37)]。地名は広く使用されているという点では公的なものであるが、とくに行政地域名や都市・都市型集落（町）・村などの集落名は行政上、公認された名称である。したがって、改名、旧名復帰、合併・分割に伴う新名称の成立などの変化もある。こうした外国地名は、その公式性のために、たとえ日本語表記であっても、より早く慣用主義から抜け出し、翻字主義や表音主義へ移行すべきである。確かに、モスクワやウラジオストクなど、主要なかつ長く使い慣れた日本語表記を別の日本語表記に替えるのは難しい。しかし、地名の公式性を重視すれば、困難であっても着手しなければならない課題である。この場合も、自然地名はどのように扱うか、翻字主義と表音主義の関係をどのように位置づけるかなどの検討も必要になる。第２に、日本語表記に幅はあるが、国内や世界の外国地名表記の趨勢を踏まえると、翻字主義や表音主義への表記替えが求められている。こうした表記替えを全地名を対象に一斉に実施するのであれば地名の分類は必要ない。しかし、表記替えの必要性と現実性の両面を考慮すると、対象地名を大きく分類して、段階的に取り組むことも考えられる。その際に、地名の数・空間的規模・使用頻度間に想定される関係を利用できる（図１）。地名は地点から広大な範囲を指し示す地域名まで、その空間的規模も多様である。しかし、都市・農村集落間では農地等の存否によって地名数と平均的な空間的規模の関係が逆転しているものと推定されるが、一般的には地名の空間的規模が大きくなれば、地名数は減少する。また、特定の地点や地域が特定分野で注目され、短期間にその使用頻度が高まることもあるが、１地名当たりの平均的な使用頻度は広大な空間的規模を有する地名群で高くなるものと想定される。そこで、ロシアの行政地域区分に伴って生ずる行政地域名やそれに準ずる地名を例に、地名の空間的規模とその使用頻度とを組み合わせて対応すると、地名数が100弱になる、連邦構成主体レベルが１つの境目になる。すなわち、連邦構成主体レベル以下を、翻字主義や表音主義への表記替え対象地名とする。あるいは、連邦構成主体レベル以上を、現行の慣用主義や表意主義も含めた表記をしばらく継続する地名とする。どちらを選択しても、国名と国内地名との区分はできている。また大経済地域や大地域は連邦管区と連邦構成主体の間に位置し、国名や連邦管区名と同様の扱いになる。自然地名なども、行政地域の空間的規模を準用して、分類することができる。

ロシア地名の日本語表記を改善するためには、上記のように地名を性格づけて段階的な対応を可能にすることも検討しながら、次の諸点も考慮されねばならない。１）多くの日本におけるロシア関係諸分野（教育・研究・行政・報道・実務など）の連携による表記改善に向けたガイドラインやプランの作成・実施体制を確立する。２）改善方向が広く共有され、表記替えがスムースかつ迅速に拡大・定着するためには、重要な局面で、広範な議論が保障される必要がある。３）活動の開始から最終目標到達までの継続的な組織母体が不可欠であり、そうした組織として公的な委員会あるいは現実的には既存学協会・研究会やその連合体が期待される。４）その影響や関係者の広がりを考えると大きな事業であり、財政的な裏付けや移行措置が必須である。例えば、移行措置の１つとして、一定期間、必要な地名についてはスペースの許す限り慣用主義・表意主義による第二義的表記を併記・注記・ルビ表記する。

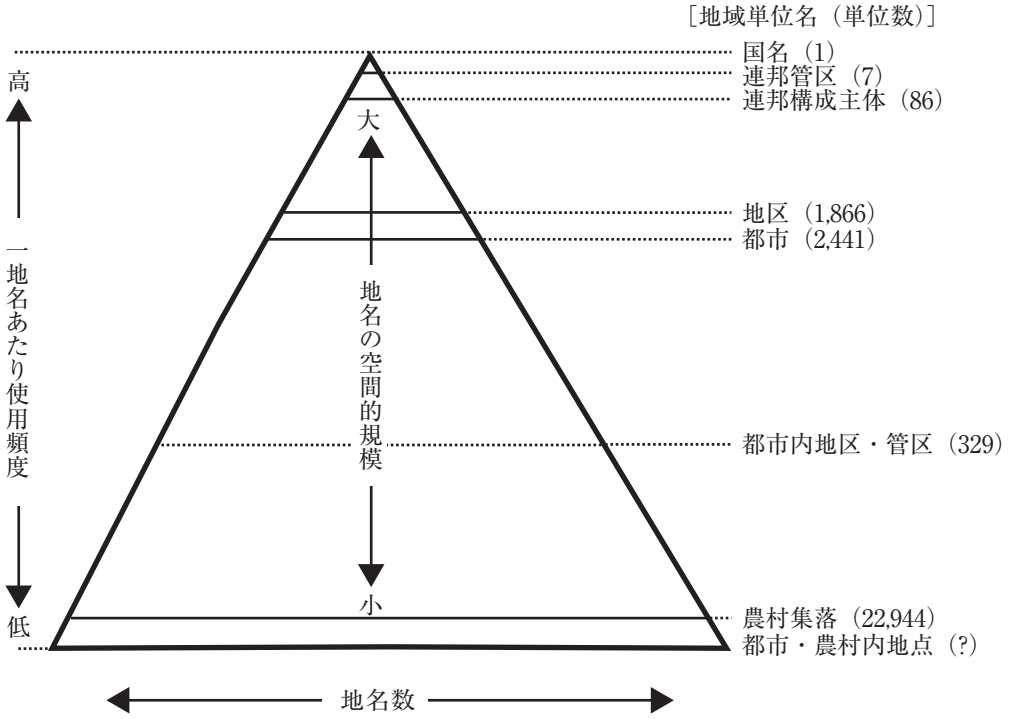

図１　地名数と地名の空間的規模・使用頻度の関係（2007 年）
—ロシアの行政地域区分を事例に—

注 1）国名については、ロシアとロシア連邦を区別していない。
2）都市には都市型集落（町）を含めている。
3）都市内地区・管区は、一部の都市でみられるだけである。そのため、図中では空間的規模のみを示している。
4）地域単位数は、2007 年 1 月 1 日現在のものである。
（Россия в цифрах 2007 により小俣作成）

Ⅵ．おわりに

所詮は一外国地名の日本語表記の問題である。また本稿の冒頭で確認したように地名は特定の地点や一定の広がりを共通認識させること、すなわち場所や地域のラベルであり、この点は外国地名を日本語で表記した場合でも変わらない。かえって、場所や地域が外国のものであるだけに、そうしたラベル機能は一層重要になる。同時に日本語で表記された外国地名は、日本語常用者にとっての、当該の場所や地域、ひいてはその国に対する認識にも影響する。その意味では、上述のように、ロシア地名の日本語表記は極めて複雑であり、かつ表記の幅が大きい。そのために現状では慣用形

を含めて地名によってさまざまの表記が存在し得るし、そこに使用者の個人的な使い慣れも生まれる可能性がある。こうした表記や表記上の手続きをめぐる複雑さは、ロシア語社会ないしはロシア社会を日本語社会ないしは日本社会にとって「不思議の国」にとどめる一因ともなる。したがって、こうした状況を単なる表記上の問題として看過することはできない。

ロシア地名の日本語表記は、ロシア語と日本語の地名表記における言語学上の差異の大きさだけでなく、日本語表記に際して選択する表記上の手続き、またそれらとも関係する地名表記をめぐる国際的な動向をどのように捉えるかなどとも深く関わっている。グローバル化の進展は日本における外国地名との関係深化を求め、ロシア地名の日本語表記についても、その重要性は今後一層増すものと思われる。

ロシア地名の日本語表記問題について、ロシア関係諸分野の広範な関係者による、一定の合意形成が必要である。そのためには、この問題の解決に向けて関係者による自由闊達な議論を通じた現状やその改善方策についての検討が求められている。

注

1） ただし、国内の地名のすべてではない。例えば、北海道に多くみられるアイヌ語起源の地名には当てはまらない。それらの地名は、発音に合わせて漢字や片仮名に置換された表記になっている。
2） 雲（2008）の拙著に関する書評にて、一部の地名についてその表記法が取り上げられている。
3） すなわち、文字の表音上の性格によって、厳密に言えばロシア文字のすべてを正確に日本文字に置換できないことになる。これはローマ字など単音文字による他の外国語地名の日本語表記についても同様である。
4） ただし、この方法も、あくまでも長くそうして来たということである。現地呼称ないしは現地音の尊重ということになれば、その結果はともかくとして、こうした方法自体も検討対象になる。
5） この場合、Башкортостанを翻字ではなく、日本語訳して「バシコルトスタン」とした後でも、バシコルトスタン共和国という表記が得られる。しかし、その場合、「バシコルトスタン」は日本語訳とはいえ、片仮名部分は日本文字への翻字とみなすこともできる。そこで、固有名部分の訳語に漢字が含まれていない限りは、翻字として扱う。本稿では以下、翻字に関して同様の位置づけをする。
6） ここでの慣用は正しい表記法には該当しないが、広くみられるという意味である。やはり省略は不適切であろう。これについては後述する。
7） このような方式の日本語表記は、本稿では慣用主義に分類されており、Ⅲ－３－２）、３）で取り上げる。
8） 第一義は、自然条件に基づく地域の性格付けであり、日本海沿岸からシホテアリニまでとハンカ湖沿岸低地を含み、行政地域上はПриморский крайプリモルスキー地方とハバロフスク地方南部に広がっているとしている（Котляков, 2003: 601）。
9） アクセントは発音上、力点はつづり字上のことがらである（『研究社露和辞典』：2749）。
10） なお、丘陵地形であるので、さらに「丘陵」を加えた表記もみられる（帝国書院版『新詳高等地図帳初訂版』2008：55）。
11） 「和文の縦書きに用いることがある」（『広辞苑第六版』）とされるが、横書きは言及されていないことから希であると判断できる。
12） ただし、この地図帳においては掲載される地名は主要なものに限定され、行政地域名などの掲載は極めて少ない。

13）帝国書院が３種類、二宮書店は4種類の高校地図帳を発行しているが、両社合計では高率の採択シェアを占める。例えば、2008年度使用の東京都公立高等学校用教科書採択結果によると、教科書別学校数で両社のシェアは94.9％、今回取り上げた2種の地図帳のみでも合計シェアは56.0％であった（東京都教育庁指導部、2007）。

14）「一部を除き」に該当する例として、次のようなものがある。Приволжская возвышенностьは、形容詞の用例としてではあるが、４辞典中では唯一岩波書店版露和辞典だけで取り上げられ、語義として「（Ока河口よりВолгоградに至る）ヴォルガ川右岸の高地」（p.1455）が与えられている。

15）研究社版の「聖ペテルブルグ」については、辞書発行当時サンクトペテルブルクという地名は存在しておらず、レニングラードの旧称として与えられた語義であり、除外した。ただし、語末の表記は検討対象に含める。

16）博友社版露和辞典のウラジボストークは、より一層発音に近い表記を選択すればヴラジボストークになる。

17）ただし、表音主義としてもロストフ・ナ・ダヌーという表記は２方式が混在していると思われる。なぜなら発音転写でもオーカニエの場合、翻字と同じロストフ･ナ･ドヌーとなり、アーカニエの場合、ラストフ･ナ・ダヌーとなるからである。

18）表中で該当しない地名は、第二義的な表記において幅のあるカフカスと、かつて地図帳で共通した旧名を採用したカリーニングラードである。これについては後述する。

19）語末ньの表記については、チュメニは1988年研究社版辞書以来全ての地図帳・辞書、リャザニは1994年以降で２地図帳・１辞書、アストラハニとカザニは1995年の博友社版辞書以降で１辞書・２地図帳で子音の軟音化を反映させたものになっている。このようにロシア地名が同一語尾であっても、その表音主義に基づく表記の定着には地名によって時差がある。なお、その経緯の解明も興味ある課題となるが、本稿の目的ではないので割愛する。

20）具体的にはⅢ－１－２）で言及した。なお、帝国書院版地図帳の旧版（11年前）ではヴォロネシと表記されたこともあった。

21）Приволжскийを直接、名詞形に変形してはいないことは、Приморскийの場合と同様の理由による。

22）帝国書院HPによる（http://www.teikokushoin.co.jp/textbook/high/index01. html: 2008年９月28日最終閲覧）。

23）『新詳高等地図―初訂版―』（1998年１月発行）p.143参照。

24）『ブリタニカ国際大百科事典　小項目電子辞書版』（2007年４月）における「地名」の項目による。

25）このアトラスでは、地名は関係国政府、通常その公的な地図作成機関によって公認されているものをベースに表記されている。これはイギリス公用地名政府常設委員会（the United Kingdom government's Permanent Committee on Geographical Names for British Official Use）の基本原則の１つにも合致していると表明している（Times Atlas 2007）。

26）地図中ではAltaskijと表記されている（Britannica Atlas, 1996: 87）。これはjが脱落しており、印刷ミスだと思われる。ちなみに巻末の地名索引では、Altajskijとなっている。

27）その方式に従えばSverdlovsk Oblast'とすべきところが、Jekaterinburg Oblast'となっている。

28）ただし、カフカスの例で、南側ではアゼルバイジャンやグルジアにおける表記の翻字という手続きもあり得る。なぜ英語の慣用形ないしは英訳されているかについては、英語・米語を地図発行元が母国語としているからなのか、国際語であるという意図があるか否か、あるいは両者なのかは明確ではない。

29）この表記を著者も使用したことがあり、『新版ロシアを知る事典』（2004、平凡社）でも使用されている。

30）Приморский крайプリモルスキー・クライないしは沿海地方が形成される前、その範囲は現在のものとは異なるが、行政地域名を「州」とするПриморская областьプリモルスカヤ州、全訳するとまさに沿海州が1856年～ 1920年に存在した（Иванов и др.: 562）。

31）この場合、パヴォルジエは当然、固有名のみでヴォルガ川沿岸地域を指し、固有名の後に地域単位名が付くことはない。翻字主義によるポヴォルジエも同じである。

32）по-は「沿った」при-は「近接」というような意味を有するとされるが、日本語上の意味は類似していることも事実である。ちなみに、英語でもпо-はalongやnear、при-はjuxtapositionやproximityとされている（*The Pocket Oxford Russian Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.）。

33）例えば、岩波書店版露和辞典の書名をみると、現行の『岩波ロシア語辞典』（1992年）に対して、1960年刊行の『岩波ロシヤ語辞典』ではロシヤを使っている。こうした呼称変化の時期や背景の解明も研究課題になるが、ここでは扱わない。
34）前章で取り上げた地図帳はすべてロシア連邦、最新の外務省HP における「世界の国々」ではロシアと表記されている（http://www.mofa.go.jp/mofaj/ world/ichiran/i_europe.html 2008年11月22日最終閲覧）。
35）ちなみに、小規模とはいえ、コミ共和国南東部のペチョラ川上流にКомсомольск-на-Печореコムソモリスク・ナ・ペチョレという農村集落があり、それ以上に、ロシア地名としても同一のコムソモリスクが３つの州にある。
36）Ciscaucasiaシスコーカシアという表記もあるが、これはcis＋Caucasiaであり、こちら側（話者側）のコーカサス地方、すなわち北コーカサス（地方）を指す。その意味から考えても、前カフカスまたは北カフカスの英訳表記である。
37）この点は、すでに取り上げたタイムズ・アトラス（2007）でも言及されている。

文献

雲　和広 2008. 書評「小俣利男著『ソ連・ロシアにおける工業の地域的展開―体制転換と移行期社会の経済地理―』」.『比較経済研究』45-1 pp.62-64
東京都教育庁指導部 2007.『平成20 年度使用都立高等学校用教科書　教科別採択結果（教科書別学校数）』
Иванов Б.Ю., Карев В.М., Куксина Е.И., Орешников А.С.Сухарева О.В.（сост.）1999. *История отечества*. М.: Большая Российская энциклопедия
Котляков, В.М.（Гл.ред.）2003. *Географический энциклопедический словарь: Географические названия*, 3-е изд., доп., М.: Большая Российская энциклопедия.

参照露和辞典

井桁貞義編 2003.『コンサイス露和辞典〈第5版〉』三省堂
木村彰一・佐藤純一・栗原成郎ほか編　1995.『博友社ロシア語辞典〈改訂新版〉』博友社
東郷正延・染谷　茂・磯谷　孝ほか編 1988.『研究社露和辞典』研究社
和久利誓一・飯田規和・新田実編 1992.『岩波ロシア語辞典』岩波書店

【Abstract】

Some Considerations on Writing Russian Place-Names in Japanese

Toshio OMATA

The writing of Russian place names in Japanese has always been a complex matter. Depending on the writing method applied, several variations can occur for the same place name. In this article, the methods used for writing Russian place names in Japanese are categorized into transliteration, transcription, translation, conventionalization and hyphenation. The current situation of writing of Russian place names in Japanese and English world atlases and Russian-Japanese dictionaries is investigated.

The latter part of the article indicates several problems with writing Russian place names in Japanese and proposes a policy for writing improvements based on current trends in writing foreign place names.